

冬の陽

出窓に寄り添う南天の木
濃緑色の葉と、朱色の実

氷のように透き通った陽光を反射し
乾いた寒風にふるえているのか
それとも

人智に閉じられた世界に
苦笑をこらえているのか

眩しく反射する光と
葉を透けたやわらかい光と
汚れたガラス窓に落ちる影
無数に交錯する規則性
その結果としてのランダム

社会に張り巡らされた無数の法秩序
自由を希求し、それを守るための網に
もがき喘ぎ、それを切り裂く——
自由に疲れ果てた者たち
その結果としての無秩序

(どこがどう違うんだ・・・)

激烈な変化を数億倍に引き伸ばし
宇宙は寝返りを打っている——
そのことを
あの南天は知らされているに違いない
それだからこそ赤く実るのだ

風は何時間吹き続けるのだろう
僕はずっと見ているのだ
頭の中で消滅したもの——
それを置き換える、という
無意識の行為に導かれ

ふいに、その向こうに咲いている
薄紅色をした山茶花を見出す

(その向こうには・・・)

(2011.12.4)